



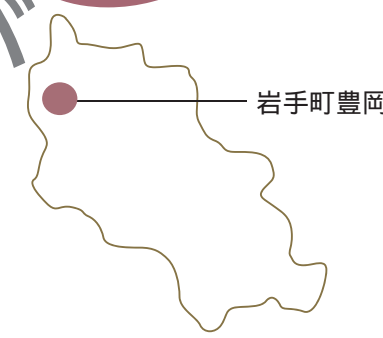
力を合わせて共同開墾を行う豊岡の皆さん。島田嶽とよばれる重くてよく切れる嶽は、高さ2mを越えるささ竹が無数に生い茂るこの地を開墾するには、必需品だったという。極寒の中の作業にもかかわらず、ユートピア建設の希望を抱く皆さんの表情には笑顔さえ垣間見える



特集 この町のかたち

戦後間もない昭和23年5月
戦争ですべてを失った人々が
からふと
樺太からこの町にたどりついた。
人々は「ふるさと」を取り戻そうと
大自然の風雨にさらされ
泥と汗にまみれながら
広大な岡を切り拓いた。
人々は、豊かな実りを心から願い
その岡を「豊岡」と名づけた。
それから59年の歳月が流れ
かつての開拓の岡は
町内一の高齢化集落となったが
激動の時代を乗り越え
生きることと
懸命に向き合い続けた人々は
今もなお、この豊かな岡に
美しい花々を咲かせている。

豊かな岡に 美しい花が咲く



この町のかたち
それはこの町に住む人の生きる姿

この町に生きる人々の姿や思いを紹介し、ふるさとのこれからを考える特集「この町のかたち」。今回は、町北西部の「豊岡」の歴史と今を紹介します。

豊岡は、三十七世帯九十人（平成十九年十月三十一日現在）が暮らす山あいの小さな集落です。この集落の誕生は、戦後間もない昭和二十三年五月、赤松の大木と無数のささ竹が生い茂る鬱蒼とした森だったこの地に、四十六戸（地元入植五戸を含む）の開拓者たちが、酪農を志して入植したことが始まりでした。人々は、戦火によってふるさとを失い、頼るあてもなくなったり着いたこの町で、ふるさとを取り戻し、再び実りの花を咲かせようと一致団結。泥と汗にまみれながら今日の集落を切り拓きました。

そして集落の誕生から五十九年。豊岡集落は現在、農業の衰退や若者の流出などにより急速に過疎が進行。高齢化率六十一％（町平均二十九・五％）という町内一の高齢化集落となりましたが、国の農業政策が大きな転機を迎えた今、「集落官農」の考え方を自分たちの生きがいづくりと集落の再生に役立てようと平成十八年五月、集落の高齢者有志が集い豊岡地区営農組合（佐藤登美男組合長、組合員十四人）を発足させ、小菊作りに挑戦。ささやかながら初年度から成功を収めるなど、その成果や今もなお集落を拓こうとする姿が、内外から大きな注目を集めています。

私たちにはまだできることがあるはず
この岡に豊かな実りの花を咲かせたい



豊岡地区営農組合
佐藤登美男 組合長
(73歳、豊岡)

この岡は私たちが生きてきた証です。しかし、思いだけではどうにもならないことがあるのも事実。開拓者として、激動の時代を生きた人間として、年老いた私たちにもまだできることがあるはずと思っていたとき、めぐり合ったのが「集落営農」でした。仲間たちとともにこの岡でたくさんの小菊と笑顔の花を咲かせ、自分たちの力でできるところまで、この岡の豊かな実りを求め続けていきたいと思ひます。

ふるさと 再生

第三章

誕生から59年が過ぎ、町内一の高齢化集落となった豊岡集落。年老いた開拓者たちが見据えた今日の「豊かな実り」。それは、「生きがいつくり」を通じて小菊と笑顔の花々をこの岡に咲かせることだった

町内一の高齢化集落「豊岡」

入植から五十九年が過ぎた豊岡は現在、急速に進んだ過疎と高齢化によって、高齢化の指標となる高齢化率（集落の総人口に占める六十五歳以上の人の割合）は、町内で最も高い六十一%（平成十九年十月現在、町平均は二十九・五%）に達し、主に年金暮らしの高齢者ばかりが暮らす、三人に二人が六十五歳以上という静かな過疎の岡に変ぼうしました。基幹産業だった農業も、一部の農業者を除いて経営を断念。しかし今、その豊岡で行われている、あるささやかな取り組みが、内外から大きな注目を集めています。

笑顔にあふれ小菊の収穫を行う豊岡地区営農組合の皆さん



手づくりの学校は今も集落の誇り

旧豊岡小学校

入植直後の昭和24年4月、水堀小学校豊岡分校として開校（当初は青空教室）。校舎は翌25年夏までにすべて住民の手づくりで建設された。同33年豊岡小学校に昇格し、昭和61年3月の閉校までに215人の児童を送り出した。現在はキジの養殖場として使用されている



往時の面影



しかし、過酷な作業に耐えかねて脱落者が続出。八月には組合員の数は半減していました。それでも、新たな希望者を加えて作業は続けられ、一年後の昭和二十四年の春には、二十棟の住宅が完成。盛岡市から家族を迎え入れ、一棟に二世帯が同居する完全共同生活ながら、地元入植の五戸を加えた四十六戸の集落が形づくられました。また、学校は昭和二十五年夏に、寺は同年冬にそれぞれ完成。ごく一部の経験者と素人の集団が力を合わせ、学校まで建設した例はほかの開拓ではほとんど例がない

月明かりの下で働く母の姿
私たちが頑張ろうと思った



豊岡小第1回卒業生
五十嵐サヨ子さん
(70歳、豊岡)

私は豊岡小の第1回の卒業生。勉強というより子守をしに学校へ行ったように思いますが、大人たちはまだ皆に住宅が行き渡らないうちに子どもたちのためにこんなに立派な校舎建ててくれました。うれしかったですね。思い出すのは月明かりの下で豆をまいている母親の姿。私たちが頑張らなきゃと思いましたね。



昭和26年1月に行われた初の合同結婚式で結ばれた
鈴木正雄さん(77)
豊美さん(74)



ゴム長靴と軍手の手袋、借り物衣装
ささやかでも幸せな結婚式でしたよ

当時は本当にお金も物もない時代でしたから、私たちの結婚式は寺で、結婚披露宴は小学校で、四組が合同で行いました。この日の衣装はすべて借り物で、靴はゴム長靴、手袋は軍手。それでも当時は精一杯だったんです。でも、集落じゅうの人が大勢集まってくれて、煮しめと天ぷらをご馳走に、盛大に祝ってくれました。ささやかでも幸せな結婚式でしたよ。

く、その事実は今でも集落の誇りになっています。入植後も、食料や物の不足する時代はまだまだ続きました。そんな中、集落の中で結ばれる夫婦も始め、数組が合同で行う結婚式が集落内で行われることもありました。厳しい生活の中でも、ふるさとならではの幸せが、確かに育まれていました。苦境が続いた豊岡のその後

もと高冷地で農業には不向きな土地柄だったため、白目大豆や菜種油の栽培などを試みましたが、地力の低下などにより長続きせず、安定した経営を求めて酪農にも取り組みましたが、規模が小さかった上に牧草地も不足し、高い収益性は望めませんでした。次第に農業全般が低迷後継者となる若者たちの流出が相次ぎ、農業だけでは生活を支えることが困難なことから、次第に出稼ぎによって収入を確保する生活が主流になりました。そのため、集落の高齢化は急速に進んでいきました。

取材を終えて

豊かな岡は語り掛ける

「集落」は、私たちに最も身近な「この町のカタチ」です。しかしその集落は今、大きな岐路に立たされています。国土交通省が平成18年4月を調査基準に行った「過疎地域等における集落の状況に関するアンケート調査」によると、今後10年以内に消滅、またはいずれ消滅する可能性がある集落は今、全国で約2,600余りに上ると試算されます。また、「限界集落」とよばれ、集落全体が高齢化し、集落機能を失った集落が各地で続々と現れ始めています。こうした例は、私たちが住む岩手町を含む地方の中山間地の自治体にとっては共通の課題です。また、岩手町の中の豊岡という構図は、岩手県の中の岩手町、日本の中の岩手県という構図にも同じことがいえます。経済的発展という側面からだけでなく、広い意味でこの町の価値を見つめ直すことは、市町村合併や過疎・高齢化などと向き合う上で、とても大切なことです。約60年というある意味では短い時間の中で、集落の誕生から過疎に至る道のりを歩んだ豊岡集落ですが、その姿と懸命に生きて人々の曇りのない目線や思いは、私たちの先人が刻んできた「この町のカタチ」の尊さを改めて訴え掛けます。

豊岡地区営農組合の佐藤登美男組合長は「豊岡の開墾が始まると、無人の密林を切り開いた畑から、多数の土器や土偶などが見つかりました（現在の豊岡遺跡（昭和39年に町指定史跡）、縄文晩期、現在も発掘調査中）。太古の人々も、私たちのようにこの地を切り開き、この地に暮らしたのでしょうか。不思議な縁を感じます。きっと歴史は、こうして刻まれてきたのでしょ

う」とこれまでの歩みに思いをはせます。町のカタチ。それはこの町に住む人の生きる姿。「この町のカタチ」は、そうした歴史とたくさんの人々の思いで形づくられています。

最後に、この特集の編集にあたって、多くの皆さんからご協力を頂きましたことに、心から感謝を申し上げます。

豊かな岡に思う



清藤隆夫さん
(73歳、豊岡)

自分の生き方に満足や不満はあっても自分の運命に後悔はしていません。この町で暮らしてよかったと思っています。

戦火でふるさとを失い、たどり着いた岩手で開拓者となって今、年老いた私たち。そのような道のりを歩んできたことは、私たちの「運命」であったかもしれませんが、しかし私は、おそらくこの岡に生きてきた人たちは皆、自分の生き方に満足や不満はあったとしても、その運命に後悔などしてはいないと思います。なぜなら、皆一生懸命に生きてきましたから。ここにこうして平穏に暮らす場所があるということ。これ以上ありがたいことはありません。この地に、そしてこの町に暮らしてきて良かったと心から思っています。



豊岡自治振興会長
北構政美さん
(56歳、豊岡)

今度は私たちが皆さんを支える番です。先人の努力と、町の皆さんの支えに心から感謝しています。

私は昭和26年生まれで、物心ついた頃には開拓事業は既に軌道に乗り始めていましたが、当時の生活はまだまだ苦しく、家族も多かったため、私たちの世代は、なるべく早い自立を求められました。私は18歳で自衛官となり、30年以上もふるさとを離れていましたが、退職を機に5年前に帰郷。年老いた両親をふるさとに残して自分が選んだ仕事に一生懸命取り組むことができたのは、集落や町の皆さんの支えがあったおかげです。今度は私たちが皆さんを支える番です。高齢化に向き合っていくためには、地域ぐるみの取り組みが不可欠です。今後は自治振興会が中心となって、集落のさまざまな課題の克服に取り組んでいかなければならないと考えています。



の大産地化が検討されるなど、今後の広がりが大いに期待されています。わずか8アールの畑の実りと皆さんの熱意は、想像以上に大きな町全体の実りとなったのです。

栽培を計画しています。さらに、豊岡の取り組みによって集落営農による小菊栽培の有効性が示されたことから、今後のビジョンの一つに集落営農による小菊栽培を計画しています。さらには、豊岡の取り組みによって集落営農による小菊栽培の有効性が示されたことから、今後のビジョンの一つに集落営農による小菊栽培を計画しています。さらには、豊岡の取り組みによって集落営農による小菊栽培の有効性が示されたことから、今後のビジョンの一つに集落営農による小菊栽培を計画しています。

あふれんばかりに実った小菊と笑顔の花 豊かな実りを喜ぶ佐藤組合長 寡黙な兄の堀江一男さん(89) = 写真左 = とにぎやかな弟の堀江範光さん(76) はいつも二人仲良く作業に参加 収穫した小菊を皆で倉庫に運び込む。出来は上々だ 実りの第一歩はここから。59年前もそうだったように



豊かな岡に

動き始めた「開拓者」たち
平成十八年五月、豊岡集落の高齢者の有志十四人は、新たな農業形態として注目を集めている「集落営農」の考え方を、自分たちの「生きがいづくり」に役立てようと、「豊岡地区営農組合」(佐藤登美男組合長)を設立。小菊の

栽培に乗り出しました。一般的に「集落営農」とは、農業経営の効率化を目的とし、集落の営業者が共同で農業経営を行い、経営の効率化を図ると同時に、集落の農地や集落そのものの保全を図ろうとする考えです。平成十九年度から始まった国の新しい農業施策「経営安

定対策」でも、今後の農業の担い手として、集落営農による農業共同経営体「集落営農組織」が挙げられています。

8アールの畑の大きな実り

同組合では平成十八年度から二カ年にわたり、農協や農業改良普及センターなどの指導を受けながら8アールの畑に小菊を栽培しました。長く農業に従事していたとはいえ、小菊栽培は初の挑戦。ひたむきで地道な努力が実を結んだ結果、初年度から栽培に成功。約九十万円の収益を上げました。「生きがいづくり」として始めた取り組みは、数万円の分配金を生み、名実ともに喜びを分かち合いました。そして、その成果はそれだけにとどまらず、恵まれない気候条件と限りある高齢者の労働力にもかかわらず、ささやかながらも実利を伴う成功を収めたことは、農業経営を念頭に設立されたほかの営農組合の関係者を大いに驚かせ、その後の取り組みに大きな影響を与えました。豊岡の事例を参考に、今年度は3つの集落営農組織が小菊栽培を開始。来年度は新たに3組織が栽培を計画しています。さらに、豊岡の取り組みによって集落営農による小菊栽培の有効性が示されたことから、今後のビジョンの一つに集落営農による小菊栽培を計画しています。

豊岡神社例大祭に勢ぞろいした豊岡の皆さん



豊岡神社例大祭は毎年9月に行われる集落の恒例行事。今年も集落中の仲間たちが一堂に顔をそろえました



川原木地区営農組合副組合長
横沢稔秋さん
(47歳、川原木)

「挑戦する」ことの大切さを学ぶ私たちの取り組みに還元したい

高齢者の有志による豊岡の皆さんの取り組みの成果は、ややもすれば今に生きる私たちが忘れがちな「挑戦する」ということの大切さを教えてください。農業や集落を守っていこうという気持ちを同じくする立場として、私たち自身も、勇気を持って今後の集落営農の取り組みに挑戦していきたいと思っています。



岩手町役場 農林環境課 集落営農担当
地館浩二主任
(35歳)

新たな農業の可能性を拓いた豊岡とともに町の豊かな実りを育みたい

「生きがいづくり」という異例の視点から集落営農に取り組み成功を収め、町の農業経営の新たな可能性を拓いた豊岡の皆さんの姿は、行政の施策が本来、自らのより良い暮らしに役立てる手段であることを改めて教えてください。これからもこうした町の皆さんの気持ちを大切に、ともに町の豊かな実りを育てていきたいです。

豊かな岡に花が咲く

おわり